

授業でできる即興型英語ディベートのご紹介

中川 智皓

1. はじめに

・昨今、英語教育分野において、アクティブラーニング、4技能、ディベートなどのキーワードを多く耳にする。本稿にて紹介させていただく即興型の英語ディベート(中川, 2014)は、いずれのキーワードにも関連する活動であり、授業をはじめとする教育現場で活用されれば幸甚である。

日本では、証拠資料を事前に収集して議論を構築する準備型のディベートの歴史が長い。準備には数週間のものから半年、1年までも時間を要することがある。これは、証拠(エビデンス)収集力が鍛えられやすく、「証明」を重視したスタイルである。一方、海外では即興型のディベートも教育現場で広く用いられている。これは、パラメンタリーディベートと呼ばれるもので、パブリックスピーチスタイルのディベートである。準備には15分や30分など短い時間を必要とし、証拠資料を集めるのではなく、自らの知識を用いて議論を用意する。論理的に物事を伝えることはもちろんのこと、エビデンスを読まずとも持っている知識を効果的にまとめて、一般聴衆を「説得」するためのディベートである。声の大きさやアイコンタクト、身振り手振りなどの表現も説得において重視される点である。ここでは、パラメンタリーディベートの本質的な部分を取り出し、通常授業に導入できるようアレンジした形式を、なじみやすい・理解しやすい表現として即興型英語ディベートと呼んでいる。50分で完結する即興型英語ディベートは、クラブ活動などの一部のメンバーができるものではなく、一般生徒が十分参加可能な形式であることも特徴である。

2. 即興型英語ディベートで身につく力

即興型英語ディベートでは、複数の力が同時に鍛えられることが魅力の1つである。主に、次の5つの力が挙げられる。

- ① 英語での発信力
- ② 論理的思考力
- ③ 幅広い知識
- ④ プレゼンテーション力
- ⑤ コミュニケーション力

即興型英語ディベートでは、ルールに基づいて全員がある一定の時間を話さねばならない。集めた資料で準備した文章を読むのではなく、自分で考えた議論の要点を書いたメモを頼りに、何とかジャッジに伝わるよう話さざるを得ない。そのような追いつめられる環境が英語力、特に話す力の向上に効果的であると実感している。また、ディベートにおいてジャッジを説得させるためには、論理的な説明が不可欠である。自分の説明に論理の甘さがあると、対戦相手から反論され、またディベート終了後にジャッジから論理の弱さを指摘される。ディベート実践とジャッジからのフィードバックの繰り返しで、少しずつ論理的な思考に注意を払えるようになる。さらに、即興型の英語ディベートでは、実践ごとに論題が変わる。あるときには身近なテーマ、別の機会には国際問題、倫理、経済、科学技術など幅広い論題に出会うことで、さまざまな問題について考えるきっかけとなる。また、自分の知識のなさに気づいたり、ディベートに役立つのではといろいろな社会問題に対してアンテナを張ったりすることで、幅広い知識の習得につながる。「説得」のためのディベートであるため、論理だけでなく、聞き手をひきつけるプレゼンテーションにも注意を払うようになる。ディベートは個人戦ではなく、チームで協力しあうものである。限られた時間内でのチームメイトとの意思疎通も一貫性ある議論構築のためには重要となり、コミュニケーションの訓練となる。

このように、即興型英語ディベートでは上記に示す5つの力が効果的に鍛えられやすい。また、勝敗があるゲームという特性により、意欲がわきやすい

ことも特筆すべき点である。

3. 即興型英語ディベートのルール

ある1つの論題が与えられ、肯定側チーム(Government)と否定側チーム(Opposition)に分かれ、一般聴衆であるジャッジを説得する。肯定側か否定側かは主催者(教員)によって決められ、ディベータ自身で選ぶことはできない。より説得力(議論の中身、説明の仕方など)があったチームが勝ちとなる。各チーム3名の合計6名で試合が行われる。それぞれの役割名と概要を図1に示す。準備時間は15分である。スピーチ時間は、3分または2分である。ただし、前後30秒は許容範囲である。スピーカとスピーカの間には、準備時間はない。スピーカはジャッジに呼ばれれば、速やかに演台に移動する。テンポよく進行させることも間延びでつまらないディベートになることを防止する重要な点である。

質疑応答 Point of Information (POI)は、相手チームのスピーチ中に、質問やコメントを15秒以内で発言することができる機会のことである。“POI”や“On that point, sir.”などと声をかけ、質問する。質問を受けるか否かは、スピーカが決める

ことができ、受ける場合は“Yes, please.”、受けない場合は“No, thank you.”などのように答える。なお、POIはいつ行ってもよい。ただし、POIをして一旦断られた場合は、その15秒後以降から再度POIをすることができる。POIの間もストップウォッチの時間は止まらないため、スピーカは自分でタイムマネージをしながらPOIを受け返答したり、断ったり判断せねばならない。

ジャッジは、新聞を読んでいればわかる一般的な知識をもつ人と想定する。個人的な考え、専門知識、偏見をできるだけ排除し、客観的に判定する。基準は主に「内容」と「表現」の2つである。

〈内容〉

- ・主張に理由があったか
- ・反論があったか
- ・例やデータを用いて、十分に説明をしているか
- ・POIで積極的に議論しているか

〈表現〉

- ・はっきりとわかりやすいことばで話しているか(声の大きさ、スピード、アイコンタクト、身振り手振りなど)
- ・構成はわかりやすいか(論点の順番、ナンバリ

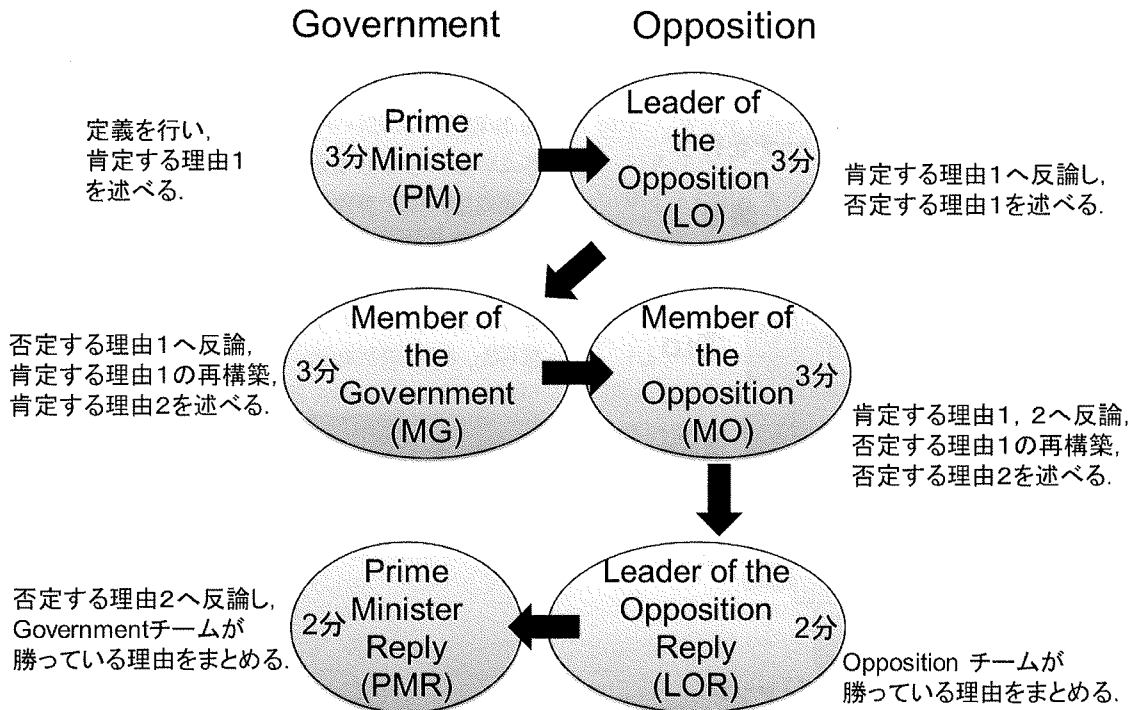


図1 ディベート進行概要

ング、サインポスト)

・スピーカ役を果たしているか

ディベートラウンドが終了すれば、議論してくれたことに感謝の気持ちをこめて、対戦相手と握手を交わす。ディベートということばかりは、口げんかや打ち負かすなどのイメージをおもちの人も多くいるかもしれないが、即興型英語ディベートはパブリックスピーチスタイルであり、意地悪な議論や失礼な態度などはジャッジの共感を得られない。いつも思いやりの気持ちをもって、紳士淑女の態度で対戦相手にも接することが期待される。

4. 授業における導入

机の配置図を図2に示す。このような島を複数作ることとなる。授業でのグループ分けは、人数に応じて臨機応変に変更できる。各チームの2つ目のスピーチ MG, MO は前半と後半担当の2名に分けて、4人対4人のディベートにするのもよい。ジャッジの生徒を複数にすることも効果的である。例えば、50分の授業例では、論題発表1分、準備15分、ディベート実践20分、ジャッジ10分、まとめ4分とすることで準備から実践、ジャッジまでを完結させることができる。

授業においては、次の補助資料を用いることで、比較的簡単に導入ができる。1つ目にプレストシー

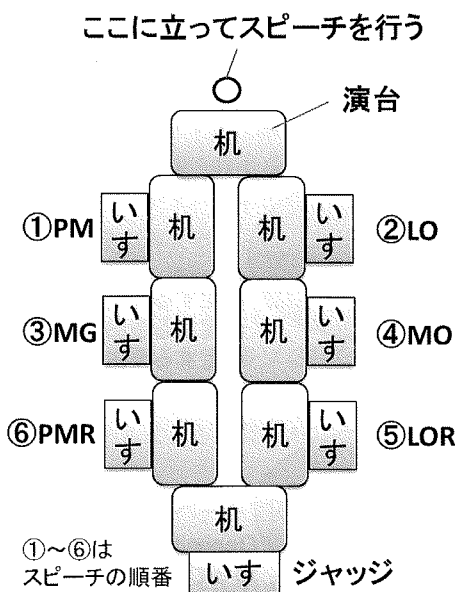


図2 机の配置

トである。準備の15分でチーム内において最も重要な論点を2つ挙げるためにブレインストーミングするためのシートである。2つ目にスピーチシートである。役割ごとのスピーチの構成を書いたシートで、2つの論点が決まった後に、各役割のスピーチシートに詳細の説明を記入していく。3つ目にフローシートである。これはディベートが始まってから、両チームの論点がどのように構築されて、反論されて、再構築されたかなどを追うためにメモをする紙である。4つ目に単語シートがある。論題に関わる英単語と日本語をまとめたシートである。主に、短い準備時間に辞書を引く手間を省く目的のものである。

授業における導入では、各校さまざまな工夫がなされている。各クラスにディベート委員を配置、スピーチシートボックスを各教室に設置するなど画期的な取り組み(福岡県立城南高校)や、モデルディベート用の文章を用いてロールプレイをしてルールを学ぶ(筑波大学附属駒場高校)など多様な工夫が行われてきている。SGHのプログラム(熊本県立済々黉高校など)や、年間のカリキュラムに位置づける(大阪教育大学附属高校平野校舎など)など、通常の授業の中で実際に即興型英語ディベートの実践が行われている。学期ごとにクラス対抗試合を設定し、モチベーションを高めるプログラムも効果的である。

初めは3分の規定時間を十分に話すことができず、30秒程度でスピーチが終わってしまう生徒もたくさんいる。しかしながら、少しでも表現できたことの達成感、また英語で言えないもどかしさ、さまざまな感情がディベート後に芽生える。

「自分の考えを英語で相手にきちんと伝えられるようになりたい。だからもっと英語を勉強しようと思った。」「自分の知識のなさを知った。これからは

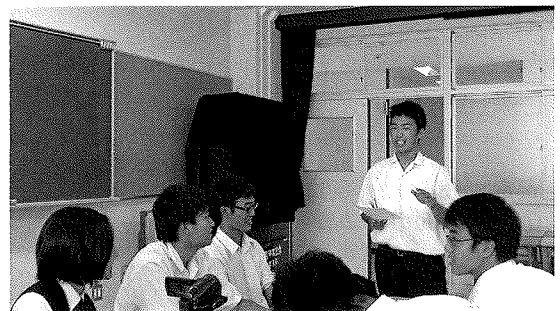


図3 授業でのようす(福岡県立城南高校)

社会の問題について知っていきたいと思う。」など前向きな感想がたくさん寄せられている。即興型英語ディベートでは、たとえ英語がネイティブレベルでなくとも、内容が最低限通じる英語、伝わることがまず重要であるため、恥ずかしがらずに積極的に発言するよう鼓舞することも大切である。また、即興型英語ディベートにおいては、英語さえじょうずであればよいのではなく、むしろ発言内容がいかにか説得的であるかという点が大きく勝敗に関わるため、普段は英語の授業であまり活躍しない生徒がディベートにおいて評価されるケースもある。英語力のみを鍛えるコンテンツではないため、指導面や評価方法に課題もあるが、一般的な知識をもつ社会の一員として英語をツールとした活動ができるよう生徒を導き、時には互学互習することが大事であると考えている。

5. おわりに

即興型英語ディベートに取り組む生徒、教員、学校は年々増加してきている。授業導入の前段階で、まずは即興型英語ディベートを知る、そして実践する機会も広がっている。例えば、首都圏では複数の公立高校が集まって対戦する即興型英語ディベート交流大会(於 東京都立西高校, 2014, 2015)(日本経済新聞, 2015)、神奈川県公立高校即興型英語ディベート交流大会(於 湘南高校, 2015)が挙げられる。他校との交流によって、学習への意欲が高まることがわかっている。また、初心者から学べる場として、8月の全国高校即興型英語ディベート合宿(文部科学省助成事業, 2015)では、授業に導入できる形式で多数の実践ができるプログラムが生徒、教員それぞれに向けて提供されている。12月には全国大会(パラメンタリーディベート人財育成協会, 2015)、1月には世界交流大会が開催され(朝日新聞, 2016)、さらなる目標となる環境も整えられてきている。特に、世界交流大会では本即興型英語ディベートそのままのフォーマットで、海外の生徒と同じ土俵で議論ができ、大きな自信につながる。

筆者の専門は機械力学であるが、即興型英語ディベートの経験は研究への取り組みや国際学会発表をはじめとするアウトリーチ活動にて非常に役に立った。将来、専門が何であれ、英語をツールとして効果的に議論を行うことが日々求められるグローバル



図4 熊本県立八代高校チームとアフガニスタンチーム 試合終了後に握手(PDA 世界交流大会にて)

社会において、即興型英語ディベートは多様な考え方を受け入れ、自らの意見を堂々と伝える有効な訓練の1つになっていくのではないかと思う。

最後に、文部科学省助成事業をはじめ、多くの授業や研修会でお世話になった学校関係の皆様へ深くお礼申し上げます。

参照サイト

<http://englishdebate.org/>, 文部科学省助成事業 高等学校における「多様な学習成果の評価手法に関する調査研究」、高等学校における即興型英語ディベートプロジェクトウェブサイト(2016. 2. 29 参照)

<http://www.pdpda.org/>, 一般社団法人パラメンタリーディベート人財育成協会(PDA)ウェブサイト(2016. 2. 29 参照)

参考文献

中川智皓(2014)『授業のできる即興型英語ディベート』

『日本経済新聞』(2015. 12. 4 夕刊)「即興ディベート 英語鍛錬」

『朝日新聞』(2016. 2. 22 朝刊)「世界の高校生 英語で即興ディベート」

(大阪府立大学工学研究科助教)